

「白峰」解釈覚え書き

—「関守にゆるされて」と「松山」の歌と—

三 沢 諄 治 郎

一、関守にゆるされて

兩月物語の第一話「白峰」の冒頭の文、

○あふ坂の関守にゆるされてより、秋とし山のもみち見過しがたく、
浜千鳥の跡ふみつくる鳴海がた……

その中の「あふ坂の関守にゆるされてより」という句には、何らかの典故がありそうに感ぜられながら、まだ、それらしいものも見つからず、さりとて、別に難解な意義とも思われないので、諸家の解としても極めて軽く、単に「逢坂山を越えて」という程度に扱われ、然しながら胸中何となく安からぬものを覚えつつ、今日にいたっているという状態ではなからうか。今二、三の解釈書についてその口語訳乃至語釈・参考などの大体を挙げて見ると、

(A) 逢坂山を越えて東国に向ってから、

(B) 逢坂の関守が関所の通行を許して交通が自由になってから、

(C) 逢坂山を越えて東國の旅に出かけてからという意味の換喩的表現。

(D) 逢坂の関の番人から関を通ることを許されてから、東の方へと

歩をすすめ、(注)京都から逢坂の関を過ぎて東に行くことをいう。

(E) 逢坂山の関所の番人に(関を通ることを)許されて(東国に向って)から、II(語釈)逢坂山を越えて東國に下ったことを、逢坂の関の番人に関所を通過することを許されたといういい方をしたのである。

B・D・Eは直訳、A・Cは意識とでもいうべきか、口語訳としてはまずこの程度のものであろう。Bの訳がいささか気になるが、これについては最後に述べることにする。こうした中であって宇佐美博士が

○清少納言の歌「夜をこめて鳥のそら音ははかるともよに逢坂の関はゆるさじ」(後拾遺集、雑二)の言葉に拠る所があるのではないかと思われる。(解釈と鑑賞33年6月号)

といわれたのが特に目に立つ発言である。

この「白峰」の物語が「撰集抄」に拠っているばかりでなく、その文の所々に右書の句をそのまま借用している部分のあることは誰人も指摘しているところで、この冒頭の部分では、

○逢坂の関守とどめかねし、秋来し山の薄紅葉見過し難く、浜千鳥

の跡ふみ附くる鳴海瀉……(撰集抄)

がそれである。つまり、この「とどめかねし」が秋成の筆で「ゆるされてより」と換えられたのである。

考えて見ると、「秋こし山」とつづくためには「関守とどめかねし」とあるのが従来の修辭法としての定石であろう。今更挙例の要もなからうが、

○もる人もありとは聞けど相坂のせきもとどめぬわが涙かな(後撰集)

○逢坂の嵐の風に散る花をしはしとどむる関守ぞなき(金槐集)など、同工異曲といふべきである。

然るに秋成が「関守とどめかねし」と「秋こし山」とのこうした緊密な関連を抛棄して、特に「関守にゆるされてより」としたのは何故であろうか。この「ゆるされ」たのは固より沙門西行であつて、まさか「秋」がゆるされたのではあるまい。「とどめかねし」という修飾句ならば「秋」にかかることになるであらうけれども「ゆるされてより」が若し「秋来し」にかかるのだとすると、それでは余りにも文勢が弛緩してくる。だから、問題の部分についていえば、ここでは撰集抄の文と秋成の文とは、まるっきり組立てが違ふものと考えねばならない。これはつまり修辭法でいう換骨奪胎という所であろう。

それにしても秋成が「とどめかねし」を捨てて「ゆるされて」と改めたには、「秋」という自然から、西行という人物への転換が然らしめたに違いないが、心理的に見て、「ゆるされ」という語に格別の執着があつたものと考えられないだろうか。ここに浮かんでくる幻想は、関守と秋との対決ではなくて、関守と西行との融和である。関守

と「とどむる」との古くさい連結はすでに秋成の興味の外にあるのであつて、せめて、

○人知れぬわが通路の関守は竹々ごとくにうちも寝ななむ(古今集、伊勢物語)

という不精でわけ知りの関守が秋成の好みとして描かれる所であらう。

然しながら二十一代集を初め歴朝数々の歌集に恋の部をさぐるならば、いかに多くの恋人たちがこの関守に怨言を放つたことであらう。清少納言の「よに逢坂の関はゆるさじ」は、さながら鉄扉の如きいかめしきで世のおきてを断定しているし、逢坂の「ゆるさぬ関の関守」は若い男女にとって永遠に怨嗟的であるかのように観られるのである。

所で、「白峰」の主人公(実は物語のワキ役に当るが)は沙門西行である。洗いすがれたようなこの世捨人は、恋の炎もさめ果てていかなる関守にもとがめられることなく、恐らく何のわずらいもなしに東路へ下つたことだろう。秋成の胸中を往來した幻はこんな風のものではなかつたらうか。これをそのまま現代風に表現すると、

○昔、清少は①「よに逢坂の関はゆるさじ」と難じたが、それ以来、恋になやむ人たちによって②逢ふことを「ゆるさぬ関の関守」は幾たびその無情を怨ぜられたことであらう。これは恋ならぬ世捨人のことなれば、③逢坂の「関守にゆるされてより」……

となりはしないか。ただし秋成は、このようなくどくどい表現は大嫌いなのである。彼にとって、清少の歌を持つて来るなどは野暮の骨

頂、恐らく匕首をつきつけられても敢えてせぬだろう。②の「ゆるさぬ関の関守」もあとの「関守にゆるされて」がある以上もとより贅物である。これらを切り捨てて、

○これは恋ならぬ世捨人のことなれば、雖なくも逢坂の「関守にゆるされてより」……

とあるべきであつたらう。然し、書き出しから西行の名を伏せて唐突の苦味をもたせているこの文に、前半のことわり書きも又不要とあつて、

○逢坂の関守にゆるされてより……

とだけに要約したのであらう。即ち①をすて②をすて、更に③の修飾をもさっぱりと捨て去つたものかと考えられる。

今一度くりかえしていうならば、逢坂の関を歌つたものには二様の表現的傾向があり、

〔A〕とどむる↓とどめよ↓とどめかねし

〔B〕ゆるさぬ↓ゆるせ↓ゆるされて

となる。選集抄は〔A〕の表現形式をとり、秋成は〔B〕の方をとつたということになる。古歌集の中に散見する〔B〕側の例歌をあげるならば、(即ち前記した③「ゆるさぬ関の関守」にあたるもの)。

○つれもなき人の心の関守は夢路までこそゆるさざりけり (風雅集)

○うき人の心の関にうちも寐で夢路をさへぞゆるさざりける (新千載集)

○越えて後物思ひける逢坂は関もる神やゆるさざるらむ (同)

○逢坂の山はゆききの道なれどゆるさぬ関はそのかひもなし (新勅撰集)

○関守の打ちぬる背の通路はゆるさぬなかと言はぬばかりぞ (新後拾遺集)

○秋の夜は関の戸ざしもゆるさなむ行きとまるべき月の影かは (新千載集)

○故里に通ふたちはゆるさなむ旅寐の夜半の夢の関守 (新拾遺集)

○うき中に名もむづましき逢坂の関路はゆるせ旅ならずとも (新純古今集)

又、秋成自身にも、

○逢坂のゆるさぬ関にたはずみて時雨をよそに過しつるかな (つづらぶみ、巻二)

とある。最後に、諸解釈の中の、(B)逢坂の関守が関所の通行を許して、交通が自由になつてから、

というのは、当時戦乱などで一時逢坂の関が閉ざされ、一般に交通がゆるされなかつたという予想を下地にしてゐるように感ぜられる。交通の自由が失われることについては「浅茅が宿」に二ヶ所、

○新関をすゑて旅客の往来をたにゆるさざるよし。

○新関をすゑて人をとどむるよし。

とあるが、何れも戦乱のためである。西行が逢坂山を越えて東国へ下つたのは康治二年、二十六歳の時といわれ、近衛帝の即位三年目であるから保元・平治のずっと前である。又、彼れが四国へ渡つたのは仁安三年(雨月物語による)とあれば西行五十歳、平治の乱後九年目にあたり、高倉帝即位の年で、別に関をとさすような混乱もなく、それに京から難波を経て須磨、明石へ出たとすれば逢坂山は越える要もな

い。かたがたこの冒頭の表現はやはり従来の古典的な意味にとるのが正しかろうと思う。

二、松山の歌

同じ「白峰」に「松山」という地名を読み入れた歌が三首ある。これらの歌の解について考えて見たい。今、例によって諸家の解を二つ三つ引くが、重複の煩を避けて、その中の一首だけにとどめておく。それでも十分に用は足せる。

○松山の波に流れてこし舟のやがてむなしくなりけるかな
この歌は実は西行の詠で「山家集」にあるが、雨月物語では崇徳上皇の御作としている。右の一首では、「松山の波に流れて」と「むなしくなりける」との意味が問題とならう。

《解の例》

(A) 松山に打ち寄せる浪に引かれて漂うてきた船は、そのまま空しく朽ち果ててしまった。(松山へ流されてきた自分は、そのまま都へ帰ることも出来ず、はかなくこの土地に生涯を終ってしまった。)

(B) 松山の岸打つ浪、あの海の浪に流れて来た船のように、ここに漂い着いた自分はまもなく空しくなってしまう。

(C) 松山の波に流れて来た船が、まもなくあとかたもなく消えてしまったことであるよ、というので、松山にお流されになった崇徳院が、おかくれになって、そのあとかたもなくなってしまったことを悲しんだ西行の歌である。

これらの解に対する感想はあと同しとして、まず、歌枕としての「松

山」なる地名をしらべて見ると、「井蛙抄」巻四に、「同名の名所」として、

○さぬきの国の松山

○陸奥の末の松山

の二つを挙げてゐる。然し、讃岐の松山は清輔朝臣集に(清輔、1104—1177、西行より十三年前没)

○松山のたよりうれしき浦風に心を寄せよ海士の釣舟と見えるのや、その前の後拾遺集に定頼卿の、

○松山のまつの浦風吹きよせて拾ひてしのべ恋わずれ貝

などが古い方で、古今集の「末の松山」の方をその元祖と見て誤りはあるまい。末の松山の所在等についての詳細な研究はすでに試みられているようだから、ここでは、これらの歌に用いられた歌語のもつ意味を考へて見る必要がある。古今集「東歌」の中の陸奥歌として、

○君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪もこえなむ

がそれらの本歌であるわけだが、これに対し宜長の「遠鏡」は

○ドウ云コトガアツタツイツテモ、オマヘヨオイテ、ワシハ外へ心ヲウツスコトデハナイ、モシ、ソナナ心ヲワシガモツタラ、アノ末ノ松山ノウヘヨ浪ガコエルデアラウ、ソナナ事ハナイコトヂヤハサテ。

と、実ははっきりした訳をつけている。後世の解もこの範圍を出てゐるものではない。思うに、これは或地方の民謡を本にして、後に和歌の正体にもがき上げたものであらう。それは何時、何処にでも成り立ち得る男女の誓約に、ただその地方の「末の松山」を即興的に材料としたのに過ぎないだらう。それは或は「末の松山」でなくとも、「中

の杉山」でも「横の竹山」でもよかつたのであろう。とにかく有り得べからざる事実を挙げて誓約の材料としたのである。金子元臣氏が、

○すべて盟誓には、常住なものを提挙して、不渝不變の意を立証することが常手段である。山嵐河帯の語は勿論、日本紀に新羅人の誓に、東の日、西に出で、ありなれ川のさかしまに流るる時まで渝らじといったも同じい。(古今集評釈)

と説いているのは要を得ている。

然しながら、この「末の松山」が多くの類似の誓いの語の中から特に強く生き残った所以のものは、やはり、その地名のもつ格別な響きが入々の心を捕えたためではなからうか。若い男女が生運水く変るまゝいと誓う心と、「末の松山」という地名とが深い結びつきをもっているために外ならないであらう。即ち「末」は将来末長くの意を出し、「松山」という地名には幸運のめぐって来るのを待つという意味を宿していると考えられる。そのためであらうか、「末の松山」は省略して「末の松」とも詠まれ、どうかすると、ただ「松山」或は「松」としてもよまれている。

更に、「浪も越えなむ」は、あり得べからざる事実を前提として誓の証としたのであるから、反対に「浪越す」は誓約を破る義になる。も一つ転じては「浪」に「涙」をかけて「浪越す」は約束を破られて失望の涙にくれるという意味を呼び出し、尚進んでは約束とは無関係に、自己の期待したことがすっかり予想に反して悲惨な運命になったことにも用い、或は単になしみの「涙あふるる」意にも用いられるに至つたようだ。

ただ、ここでは「松山」に考察の主眼点があるのだから、「浪」の

方はその転化などについて大よそに観て行こうと思う。次に、歴代歌集の中から拾い出して、「松山」を詠んだものを分類して見よう。

△A▽陸奥の末の松山
○末の松山―浪
○末の松山

△B▽二見の松
○松―浪
○松―浪

△C▽松
○松(待つ)

△D▽讃岐の松山
○松山
○松山
単に「松」として用いたのは例外なく「待つ」意をかけたものを取りあげた。

○「末の松山―浪」
(1)君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪もこえなむ
(古今集)

……内侍のかみ曹司の局より藤波を物より打として侍りければ
……
(2)うしろめた末の松山いかならむまがきの島をこゆる藤波
(夫木集)

(3)音に聞く末の松山けふこそはみちくる波のこゑたえず見ゆ(ク)
(4)逢ふことはかけても云はじあだ波の越ゆるにやすき末の松山
(統拾遺集)

心変り侍りける女に、人に代りて
(5)契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山浪越さじとは
(後拾遺集)

(6)ふる里の人に見せばや白瀬のきくより越ゆる末の松山
(後拾遺集)

(新勅撰集)

(7)いつしかと末の松山かすめるは波とともにや春の越ゆらむ

(新千載集)

(8)いかにせむ末の松山波こさば峯の初雪消えもこそすれ (金葉集)

(9)瀨にうつる色にや秋の越えぬらむ宮城が原の末の松山 (夫木集)

(10)老の波越えける身こそ哀なれ今年も今は末の松山 (新古今集)

(11)君が代は末の松山はるばると越す白瀨の教も知られず (金葉集)

(12)秋風は浪と共にや越えぬらむまだき涼しき末の松山 (千載集)

(13)いたづらにいく年波の越えぬらむ頼めかおきし末の松山 (新勅撰集)

(14)浦近くふりくる雪は白波の末の松山こそかとぞ見る (古今集)

(15)末の松山もかすみの絶間より花の波越す春は来にけり (純拾遺集)

(16)瀨こさば恨みむとこそ契りしかいかなりゆく末の松山 (純後撰集)

(17)波越さむ袖とはかねて思ひにき末の松山尋ね見しより (拾遺愚草)

(18)思出でよ末の松山末までも波こさじとは契らざりきや (古今集)

(19)おのが妻波こさじとや恨むらむ末の松山をじか鳴くなり (壬二集)

(20)霞立つ末の松山ほのぼのと瀨にはなる横雲の空 (新古今集)

(21)頼めおきし其の云ひ事やあだなりし瀨こえぬべき末の松山 (山家集)

右の歌どもの大半は歌枕の「末の松山」と「浪こそ」との二つを新

趣向で結び合わせることに苦心しており、従って「浪こそ」の方に工夫

の重点がおかれている。その中で(7)「いつしかと末の松山」は末を特

来の意にかけ(9)「なりゆく末の松山」(10)「末の松山末までも」の末も

将来の意である。「松山」には待つ[○]の意があらう。(11)「今年も今は末

の松山」は末を末端・末尾の意にかけている。

○「末の松山」

あゝしたづの群れ居る末の松山はいくそかさねの千年なるらむ (兼盛集)

○「末の松—瀨」

次の歌どもは「末の松」を「浪」「浪こそ」と共に詠んでいるので

「末の松山」の略であるとしてよからう。

○君をこそ末の松とは思ひつれひとしなみには誰か越ゆべき (和泉式部日記)

この「末の松」は「将来のたのみ所」の意であらう。

○波こゆる頃とも知らず末の松待つらむとのみ思ひけるかな (源氏物語、浮舟の巻)

「波こゆる」は仇し心をもつ意であり「末の松」は「待つ」を呼び出

している。吉沢博士の解では、

○私を待つて居つてくれるものとのみ思つて居りました貴女が、外

の男に心変りして居るとは知らずに何といふばかな私でせう。

谷崎氏には、

○古今集、君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなむ

を踏まへた歌。あなたがあだし心を持つやうになりなされたとは

知らず、ひたすら私を待つてゐて下さるものとばかり思つてゐま

した。

例末の松まつ夜ふけ行く空暗れて浪より出づる山のはの月

(新後拾遺集)

例末の松昔よりまつ君を置きて波高くともこさじとぞ思ふ

(千五百番歌合)

例おひもせずおひずもあらず末の松何かこすへき沖つ白浪

(朝光朝臣集)

例越えにける浪をば知らで末の松千代までとのみ頼みけるかな

(後拾遺集)

例いつとなく波のかかれば末の松変らぬ色をえこそ頼まね

(続後拾遺集)

例荒いそのみるめは猶やかつくらむ末の松まで浪高くとも

(相模集)

例いつとなく浪や越すらむ末の松まがきの島に心せよ君

(ク)

例末の松ひきにぞきつる我ならぬ浪のみをると聞くがねたさに

(重之集)

例末の松年なみこゆる山の端のかすめばやがて春のあけはの

(拾玉集)

例末の松あだし心のゆふ沙にわが身をうらと浪ぞこえぬる

(続千載集)

例末の松まつ夜はあけて変るとも越すてふ波の声し立てすば

(拾遺愚草)

例ふるさとにたのめし人も末の松まつらむ袖に浪やこすらむ

(新古今集)

例末の松上こす波にみる鴨の堪へて過ぐるや海士の釣舟(十二集)

例末の松上こす波の木の間より光ぞこほる冬の夜の月(ク)

例末の松まつ夜幾たびすぎぬらむ山こす波を袖にまかせて

(秋篠月清集)

以上のうち(例・例・例・例・例)は何れも「松」を以て「待つ」を呼び出して居り、(例・例)は「末」に将来の意を宿らせている。例は恐らく「松」の寿と「千代」とを結んだものであろう。次の例と同題である。

○〔末の松〕

例たびたびの千代を遙かに君や経む末の松よりいきの松まで

(後拾遺集)

○〔松山―浪〕

次の歌どもは「松山」を「浪」「浪こす」と共に詠んでいるので、やはり「末の松山」の略と見てよからう。

例あた言は音にぞ聞きし松山にめにみすみすもこゆる浪かな(宇津保物語、藏開)

(續拾日記)

例松山のさしこえてしもあらじよを我によそへてさわく浪かな

(貫之集)

例松が枝に咲きかかされる藤波を今は松山こすかとぞ見る

(元良親王御集)

例いつしかとわが松山の今はとて越ゆる浪にぬるる袖かな

(続千載集)

④あけくれと我まつ山の今はとて越ゆる波にぬるる袖かな

(清慎公集)

⑤思はじと思ふものから松山のすゑこそ波に袖はぬれつつ

(統後撰集)

⑥松山にうきは越すとも君をおきて波の立つ名はあらじと思ふ

(清慎公集)

⑦松山は変らぬ色し高ければ波越すことをまだ聞かぬかな

(〃)

⑧松山の此方彼方に浪こえてしほるばかりもぬるる袖かな

(統後撰集)

⑨松山に浪のかけたるものみればあやしかりけるねの日なりけり

(赤染衛門集)

⑩松山の石はうごかぬけしきにて思ひかけたる浪にこさるな

(〃)

⑪まつ山もこゆといふなる白波のたたむ月とはかけずもあらなむ

(敦忠集)

⑫まつ山の水は数ともおほはえず恋しき君にしき浪ぞたつ

(素性集)

⑬松山につらきながらも波越さむ事はさすがに悲しきものを

(伊勢集)

⑭いにしへの浪をりきてふ松山に思ひかれたる枝のなきかな

(重之集)

⑮右のうち(⑭・⑯・⑰)は「松」に「待つ」の意をもたせている。

○「松—浪」
⑯生立つをまつと頼めしかひもなく波越すべしと聞くはまことか
(朝光御集)

人の心かはりて侍りける比、絵に松の浪こえたるを見て……
⑯松かけてたのめしことはなけれども浪のこゆるは猶ぞ悲しき

(統古今集)

右二首とも「浪こゆ」と詠み合わせており、⑯は「松かけて」とあるから「松」は「末の松山」の略であると考えられ⑰の「まつ」は「松」と「待つ」との両意を兼ねている。

○「二見の松—浪」

⑰波こそすと二見の松の見えつるは梢にかかる霞なりけり(山家集)
西行のこの歌は「二見の松」であるけれども「波こそ」と結びつけてあることに注意を要する。

○「松」

⑰いざ子どもはや日のもとへ大伴のみつの浜松まちこひぬらむ

(万葉集、一)

⑱沖つ浪高師の浜の浜松の名にこそ君を待ち渡りつれ

(古今集)

⑲住の江のまつほど久になりぬれば芦田鶴の音に鳴かぬ日はなし

(〃)

⑳久しくもなりにけるかな住の江のまつは苦しきものにぞありける

(〃)

これらは「松」が「待つ」を呼び出すか、又は松と待つとをかけたものである。

○「磯岐の松山」

磯岐のさとの海士庄に道内裏の公事あたりけるを、守季行朝出
はしたしかるべき人なりければ……

⑳松山のたより嬉しき浦かぜに心を寄せよ海士のつり舟(清朝集)

みつなりが讃岐へいくにやり給ひける

◎松山のまつ浦風吹きよせて拾ひてしのべ恋わずれ貝

(後拾遺集)

「松山のたより」には「待つ」の意があると見てよからう。「松山のまつ浦風」は「恋わずれ」の時を「待つ」意味ではなからうか。

◎松山の涙は海に深くなりて蓮の池に入れよとぞ思ふ

(女房、山家集)

これは西行が讃岐なる崇徳上皇にお仕えする女房へお見舞の歌を送ったのに対する女房の返歌で

○日々流し給う上皇の御涙が海のように深くなって、末は遂に極楽の池に流れ込んで行ってほしいと念ずる。

○讃岐にて御心ひきかへて、後の世のこと御つとめひまなくせさせ

おはしますと聞きて……

とあるにあい応ずる。ここに「松山の涙」とあるのは、「松山」と「なみ」との縁を暗示するものであって、この涙は、すべての期待予想が破られつくした絶望の涙であることを示している。それと地名の「松山」とを結合していることはいうまでもない。この現世の「待つ」心はずでに破滅しつくしたので、せめて今は(次にある歌の)

○波の立つ心の水をしづめつつ咲かん蓮をいまは待つかな

(女房、山家集)

と、来世に期待をもつ身になったことを告げているのである。

◎浜千鳥跡は都にかよへども身は松山に音をのみぞ啼く

(崇徳上皇、保元物語)

右の一首は兩月物語にも採り入れられ、この覚え書きの目的のうちの一つなのであるが、この「松山」は、上皇の今住み給う地名としてだけ用いられたのであろうか、それとも従来の例から推して「松山」に「待つ」意がこめられているのだろうか、そういう疑問を抱きつつ、まず諸家の解を引いて見よう。

(A) 書き写した経文は都へ送られてゆくが、わが身はいつまでもこの松山に留まって声を立てて泣くばかりである。

(B) わが筆の跡は都へ行くけれど、書いた本人のわれはこの松山にとどまってただ泣くだけである。

(C) 浜千鳥のあと、すなわち書き写した経文は都へ送られて行くが、わが身はこの松山にとどまって声を立てて泣くばかりである。

(D) 私の書いた文字だけは都に行くけれども、書いた私は松山でまぶしくしのび音に泣くばかりである。千鳥の跡は筆跡のことにいう語。この歌は表面は千鳥のことにして千鳥の跡が都にゆくが千鳥自身は松のある山でむせぶような声で鳴いていると詠み、その裏に御自分の心を写したのである。

(A・B・C) は松山を単に地名として扱っているが、(D) は「松のある山でむせぶような声で」と考え、松風の音と「音をのみぞ啼く」とを結びつけているようである。そうなると「松山」が生きてくる。つまり、ここを「松山」としても「竹山」としてもよいわけであるが「松山」であることによって、現住の地名と「むせぶような声」とが助け合って生きることになる。この歌には「松山」と「浪」とのとり合わせはないけれども、「浜千鳥―都に通ふ」で遠い浪路を言外に表現していることは明らかである。この「跡」という語は、一面

には、砂上の足跡にとつて「文字」を意味するが、他面に、浜千鳥の飛び行く後ろ影を意味し、「都にかよふ」と結びつけていると考へてはどうだろうか。この千鳥の自由にゆきまきする姿に対比して、自由に都へ往けぬこの身を悲しむのである。この場合「身は松山に」という句は微妙な心理を含むものではあるまいか。そう考へてくると、「音をのみぞ啼く」の「音」は果して「松山」から「松風」を通して導き出された語であるかどうか。ここは、やはり松風ではなくて、浜千鳥自身が松山で鳴いていると見るべきではないか。故にこの歌の意は、

(イ) 浜千鳥の跡そのものは都へ行き通うけれども、千鳥自身は空しくこの松山に留まってむせび泣くばかりだ。(表)

(ロ) 私の書いた文字そのものは都へ行くけれども、書いた私自身は空しくこの松山に留まってむせび泣くばかりだ。(裏)

と二様にまとめられるであろう。所がそうだとすれば、(イ)によつて示された解釈は実はまことに不合理な事実であつて、跡は都へかよふが千鳥自身はこの地にとどまるといふことは考えられないことである。然し、「文字」と「浜千鳥の跡」とを一部で粘着せしめ、千鳥の鳴く声を耳にして、今の心情をこれに托して一首の歌にまとめようとする時、こういう不合理はゆるさるべきものであらう。比喩といふものは常にその属性の一部を犠牲にし勝ちなものである。そこで、この不合理を表面に出さぬように解を下すには、

(ハ) 私の書いた文字(いわゆる千鳥の足跡)は都へ行くけれども、書いた私自身は空しくこの松山にとどまって、(あれ、あの千鳥の哀しげに鳴くように)むせび泣くばかりであるよ。

千鳥の鳴く音が現実いきこえて来たのか、或は単にそれは「浜千鳥の

跡」から引き出されて「音を啼く」と結んだのか、どちらにも考えられるのであつて、それはどちらでもよいであらう。ただ、こう解すると、千鳥の遠く海上を飛び通う姿が消えてしまうのである。

以上、「浜千鳥」の歌は、秋成が兩月物語の「白峰」を構成するにあつて脚色した配置の場に從つて解釈を試みたわけであるが、この所の秋成の筆によれば、

○院、長き息をつがせ給ひ―されどいかにせん、この鳥にはふられて、高遠が松山の家にくるしめられ、日に三たびの御ものすむるよりは参り仕ふる者もなし。一鴉の頭は白くならずとも、都には還るべき時もあらねば、定めて海畔の鬼とならんずらん。ひたすら後世のためにとて、五部の大乘経をうつしてけるが、貝鐘の音も聞えぬ荒磯にとどめんもかなし。せめては筆の跡ばかりを都の中に入れてさせ給へと、仁和寺の御室の許へ、経にそへてよみておくりける。

浜千鳥跡は都にかよへども身は松山に音をのみぞ鳴くと、写経に添えて都へ送つた歌とある。

然るに、この歌は元來「保元物語」の巻三に見えるもので、それによれば、

○讃岐に着かせ給ひしかども、国司未だ御所を造出されざれば、当國の在庁散位高遠といふ者の造りたる一字の堂松山といふ所にあるにぞ入れまらせける。されば事に触れて都を恋ひしく思ひしければかくなん。

浜千鳥跡は都に通へども身は松山に音をのみぞ鳴く

○此の程は松山に御座ありけるが、国司すでに直嶋といふ所に御所

を遣出だされければ、其れに遷らせおはします。一日に三度の供御まゐらする外は事間ひ奉る人もなし。一暁の千鳥の洲崎にさわぐも御心を砕く種となる。一たとひ鳥の頭白くなるとも、都京の期を知らず、定めて望郷の鬼とぞならんずらん。嗣に後世の御為とて五部の大乗経を三年が程に御自筆に遊ばして、貝鐘の音も聞えぬ所に置き奉らんも不便なり、八幡山か高野山か、もし御ゆるしあらば鳥羽の安樂寿院の御墓に奉り置きたき由、平治元年の春のころ、仁和寺の御室へ申させ給ひしかば――

となつており、この保元物語に由るならば、「浜千鳥」の歌は、まだ松山においでの際で、ただ、事に触れて都恋しく思し召した折の御詠ということになる。さすれば、浜千鳥の跡は筆跡の義ではなくて、さきに私が述べたように

○都の方角へと浜千鳥の飛び行くうしろ影

とでも見るのが至当ではあるまいか。ただし、「都にかよふ」とある以上、現実には、しば鳴きつつ都の方へと飛び立ち行く姿を眺めて詠まれたのには表現が強すぎる。たとい、写経そのものをさすのでなくとも、「跡は」「身は」と対語を用いていられるのから推して、やはり、院に御仕えする女房たちの消息が(院の御意志を御取次して)都の人たちとの間に往来する義を含めたものであろうか。

また、保元物語によれば、写経を都へ送られたのは松山から直嶋へうつられてから三年も後のことである。無論、このあたり、秋成の脚色として何等史実に束縛せられる要もないわけだが、歌を解釈する上に一応も二応も参考にはなるであらう。尤も、保元物語のいうように直嶋へ遷られたのが、果して史実かどうか、これも疑えば疑われると

ところで、「山家集」によると、西行と取り交した女房の歌に、「松山の涙は海に」(嗣云々というのがあるし、又、「松山の浪に流れて」)の歌の詞書に、

○讀岐にまうでて松山と申す所に院おはしましけむ御跡尋ねけれど、かたもなかりければ、

とあるのから、末までも松山に御所があったのが正しいのではないかなど考えられる。それに対しても、西行はただ松山御在所時代に女房と消息を交したのみで、その後の御様子も知らず、御配流の後十年もたってから四國へ行脚したのだから、松山を探しても御墓所がわからなかったのだらうなどという反対な考え方もあって、まだまだ研究を要するのである。

所で、最初に問題とした「身は松山に」の義であるが、これとても、その地がすでに一種の歌枕化しているのであるから、「松山」という地名だけで、歌語としての色彩は十分なのである。前にも陳べたように「末の松山」の「末」は将来の意と解して不可はなからうが、ここではそれが表現下に沈んでいる。「松山」の「まつ」はやはり将来に何らかの幸運、乃至、期待、或はもともとと漠然とした偶然なり奇蹟なりを待つ心にも通うと解してはどうであらうか。昔の人たちが「さりと」といった、そうした心中の淡い期待は、これは人情の自然というべきではないか。手近な一例は、周知のように「大鏡」の菅公配流のくだりにある。

○雲の浮きてただよふを御覧じても、

山わかれ飛びゆく雲のかへり来るかげ見る時ぞなはたのまるさりととも、世をおぼしめされけるなるべし。

云々。こちらは菅公の如き無実ではないので、「なはたのまるる」と明らまきにいわぬが、「身はまつ山に音をのみぞ鳴く」の句の中に、万々一を期待する心理が動いてはいないだろうか。

◎松山の波に流れてこし舟のやがてむなしくなりけるかな

(西行、山家集)

これも前記した通り、「山家集」では「讃岐にまうでて松山と申す所に院おはしましけむ御跡尋ねけれどもかたもなかりければ」という詞書の下に西行の詠であるが、秋成は之をとって崇徳院の霊が西行の面前に出現するキツカケに利用し、自ら咏嘆する院の御詠として脚色している。これをまます、西行の詠として解する時は、「松山の浪に流れて」に例の「末の松山」「浪越す」の意を下地に於て、「予想がすっかりくつがえり、悲運の浪に押し流されて」の義を含蓄するものと考えられ、「こし舟の」は「流されて来た舟のように孤影蕭然たる上皇は」「やがてむなしく」は、「間もなく(朽ち果てて)空しく他界せられ(あとかたもないようになつて)しまわれたよ。」と、語句の表面はどこまでも楫を失った棚なし小舟の浪にただよい、この浦の岸辺に流れつき、やがて朽ち果てたようにも扱って居るので、一首の中には一切敬語を使っていないのである。この事は、物語作者の秋成にとつては勿怪の幸いで、この歌を直ちに取つてもつて、院の御詠にすりかえることができた。即ち「兩月物語」の上では、上皇御自身が、自己の運命を訴える意に用いて、

○一切の予想も期待も見事にくつがえつて、悲運の浪におし流され、この松山の岸辺に流れついた破舟のようなわが身は、やがて立ちあがる事もよくせず、空しくこの地で他界してしまつたこと

よ。

と解すべきであらうか。そこには深刻な自嘲のひびきを感じとられ、物語の上に良い効果をもたらしていると思う。

最初に掲げた諸家の解のうち、(C)は山家集のものとして解しているので、ここはやはり兩月の解として掲げるべきで、その差をはっきり区別すべきではあるまいか。

◎松山の波のけしきはかはらじをかたなく君はなりましにけり

(西行、山家集)

これは院の歌と同時のもので、「山家集」には右のように第五句「なりましにけり」と敬語が使われている。これも「松山の波のけしき」とあるのは「末の松山」と「浪越す」に密着するものであるが、「浪こす」となれば、それは大変な異変事であり、一切の期待と幸運とがくつがえるのだけれども、「波のけしきはかはらじを」で、この松山の波の様子は常と変つて居るようでもないのにとつてあるところから、ここは「松山」に「待つ」を含めたものではなくて、単なる地名の「松山」として扱つて居るのである。それは一方に、上皇の御他界の跡方(御墓所)もない御気の毒さと対比するのが主眼であるので、この異変に反して、松山の波のけしきは平和に静寂に永遠のくりかえしをつづけて居るのにとつて詠歌の構成を目ざしたものだからである。

兩月物語でも、これを西行の詠として居るが、第五句をば「なりましにけり」と改作している。一体、この改作は何のために行つたものであろうか。「なりましにけり」は「君」に重点がかかり、「なりましにけり」は「かたなく」を強めている。もともと、院と西行との所

縁は並々のものではないのであって、山家集を通読すれば両者の交情の濃厚さが強く感得せられる。然るに兩月物語の世界では、西行はやや冷たい批判者の立場に描かれている。故に実情の上からは、この歌は「なりましにけり」が当然の形であろう。それを秋成は敢えて改作した。愚按するに、秋成は「白峰」の想を構えるにあたって西行をして世上の道学者や僧侶たちのように強く上皇を批判する形に仕立てようとしたに違いない。社会通念というか、宗教的諦観というか、西行にはわれわれの道義の擁護者、安心立命の指導者としての地位が与えられている。それが反動的に上皇に対する作者の熱い涙となっているのである。こうした立場からは、やがて「なりまさりけり」という、深いやや冷たい句が生まれてくるであろう。そして又、この改作を施すことよって、秋成は、「白峰」を山家集や保元物語から或る距離を以てつき放しているといつてよい。三首の「松山」の歌のうち、

○この歌は一部を改め、

○「浜千鳥」の歌はその場面をとりかえ、而して

○「波に流れて」の歌はその作者をすりかえている。

従って、これら三首の解釈も、それぞれに「白峰」に即したものとして行なう必要がある。最後に、この歌(69)に対する諸家の解を記録して、この筆を措くことにする。

(A) 松山にうち寄せる涙のようすは今も昔も変わるまいと思われるのに、ひとり君のみは空しく変わり果てておしまいになったことだ。

(B) 松林に蔽われた海辺の景色は昔のまま変らないが、当時この景色をお眺めになった君は、今は空しくなっておしまいになった。

(C) 松山の浪のけしきは、少しも昔と変わりはないが、このけしきを眺めていらせられたわが君は、いまはむなしくあとかたもなくなっておしまいになったことであるよ、まことに悲しいことだ。「まつ山」は固有名詞であるが、また松におおわれた山という意もふくまれている。(1959.10.3)

写真はおなじみの……

住吉国道筋

三吉写真館

住吉国道筋阪神国道住吉宮西 バス停前

TEL神戸⑧7730番